設立の趣意

自分は元来紀州和歌山に生れたもので或事情の為め本籍は神戸市にあり兵庫縣平民であるから實は名古屋には別段深い縁故もないのである　自分は明治十三年に慶応義塾を卒業し　十五年時事新報の編輯に従事し　同十七年神戸又新日報の創刊に際し其主筆として招聘せられ　其編輯を主宰すること二年有半　同十九年時の兵庫縣大書記官今の宮相牧野子爵の推薦に依り兵庫縣勸業課長に就官した　同廿一年山陽鉄道會社の創立に際し社長たる故中上川彦次郎の勸誘に従ひ　官を辞して同社に入り運輸課長に就任し同廿八年三井銀行に入り　秘書課長深川支店長　京都支店長　横濱支店長　名古屋支店長等に歴任し　大正四年三井銀行監査役に當選就任し　翌五年三井直営の東神倉庫會社常務取締役に轉じ大正十年に及んだの

である　斯くの如く自分の閲歴の多くは實業界にあるのであるが　多年の希望として晩年何か實業外の或事業に従事したい考へから其時機を待って居ったのであるが　時節は自然に到来するものではなく　自分から其時節を作るのが近道であると思ひ大正十年意を決して断然三井家に對して辞任を申出で漸く諒解を得て同年四月始めて宿昔の希望を達し純然自由の身となったのである　固より隠退の考へで無いから扨是れからどんな仕事をするかと考へたが政治生活　教育生活　社會奉仕等色々面白い事もあるが　先つ社會的方面に何かやって見てはどうかと考へ何れの地に於てすべきかに付いても相等に考慮した末　東京も悪くは無いが東京には先輩友人の有力者が多過ぎる程多く夫々活動して居り　自分の如き微力の者が頭を出して仲間入りするの必要もなければ寧ろ或地方に於て身分相應の仕事をするのが有意義であると思

ひ　幸い名古屋には十年餘り銀行支店長として在勤せし因みもあり相當に知人も多く土地は益々發展して将来大阪に次ぐ大産業地として有望の土地柄であるが上に家族が健康上名古屋住居を希望する事情もあり　旁名古屋に於て何か社會的仕事に着手せんと十年春東京を立退き七年振りに名古屋に歸住したのである　扨何をするかと考へたがやって見たい仕事は實に数々あるが第一自分の力も大に考へねばならぬ　自分は前申す如く約四十年間實業に従事し　殊に二十五六年間三井に勤務したのであるが　實は俸給生活を續けたので別に自分で商賣をしたり金儲けをしたり思惑をしたので無く　又親から何等遺産を譲り受けたのでないから　自分の資産と言ふても唯俸給生活の餘財に過ぎないのである　そんな微力なものがどうして大膽に社會的仕事をやる事か出来るか唯自分が俸給生活を脱して自由の身となるには　平素倹約して僅か乍らも餘財

を蓄積するの外は無いと確信實行し　御耻かし乍ら東京在住中は借家に住み勿論別莊も無ければ書画骨董杯にも成るへく遠ざかり　専心節約を勵行した為め漸く生活丈けの安定を得たから　其餘財を適用し眞似事でも何か社會的奉仕を實行したいと思い付いたのが圖書館の設立である　名古屋市は七十萬を算へ歴史的一大都市であるが　市民の讀書機関としては僅かに市立圖書館一個あるのみ近来思想混乱殊に青年の思想兎角安定を欠くの嫌ひあるのは一は讀書に親しむの風が盛んならざるが為めてあって是非共青年の讀書の風を奨勵したいのであるが唯に之を勸めたりとて實効の擧がるものでなく又實際近来書籍の市價甚だ高貴であって青年が之を講讀するの苦痛も察せられるので圖書館の設立が最も時機に適し又必要でないかと考へたのである　然し微力の自分が独力て設

立するのであるから無論貧弱であるのは分かり切って居るが夫れでも無いよりも有る方が良いと思ひ　極めて不完全ながら茲に名古屋公衆圖書館を設立して名古屋市民殊に青年諸君の前に提供したのである

勿論設備萬端不充分であって書籍の如きも震災の餘波其他のため一時の買入は困難であり最初より完全を期し難いので　定めて讀書子の不満足を買ふ事であろうが夫れは漸次充實する考へである　唯本圖書館の位地は市内交通至便の地を撰み又建築は新式鉄筋コンクリートで自分としては聊か奮発した積りである　又自分独力の計画であるから自分一個の經營とすべきかとも考へたが斯る事業は永久的であるから自分の存在如何に拘らす長へに名古屋の公共讀書機関として市民に利用せらるゝを切望するの餘り最初より財團法人として夫々成規の手續を踏み名稱も公

衆圖書館としたのである　要するに自分が微力を顧みす私財貳拾五萬圓を投じ圖書館の設立を思立った趣意は大略右に陳ぶるが如くであるが名古屋の土地柄として産業上に重きを置き圖書の如きも此方面の種類を成るへく多く準備した積りである　近く開館の暁には名古屋市民は自分の微意の在る所を諒察せられ同情せられ勉めて此圖書館を利用し多少共名古屋の文化進運を助けるの機関たるを得せしめ玉はゞ　自分の本懐之に過ぎざると共に又大に光榮とする所である

大正十四年二月

設立者　矢田　績